

能になった西洋の詩・戯曲

法政大学名誉教授 西野 春雄

西洋人が能や狂言に初めて接したのは、16世紀末の安土桃山時代である。来日した宣教師たちが翻訳・編纂し、1603年（慶長8）に刊行された『日葡辞書』には、能や狂言がとりあげられ、的確な語釈がなされている。またポルトガル人宣教師レイス・フロイス（1532－1597）は、西洋演劇と能との比較を興味深く記しており、彼らの見聞は西洋に伝わったにちがいない。しかし、西洋人による能の受容と芸術活動、および本格的な研究は、19世紀末を待たなければならなかった。

近代日本の黎明期に来訪し、能や狂言に魅せられた西洋人は、鑑賞を重ね、理解を深め、あるいは母国語に翻訳し、あるいは調査・研究を進めて、優れた著作を発表した。詩劇としての能にインスピレーションを受け、新たな劇を創造した劇詩人もいれば、世界で初めて事典的機能を兼備した浩瀚な能面研究書を出版した東洋美術史家もいる。また、訪れずとも、謡曲の詩的魅力に惹かれて翻訳を試み、西洋に世阿弥芸術論を紹介した東洋文学研究者もいる。そして現代では、欧米人による優れた英語の新作能も生まれている。

本講演では、能に深い関心と透徹した理解を示し、その芸術活動に能の影響を受けて創作された戯曲が、逆に日本の能に翻案された事例を中心に、「能になった西洋の詩・戯曲」について概観する。日本から発せられた能が、西洋の演劇に影響を与え、開花し、さらに日本へ逆輸入されて新たな能を生み出したこと、いわば世界を一周して環（わ）を描いた作品たちの軌跡を追ってみたい。対象は、日本語による能に限定し、世阿弥の作劇論『三道』（1423年）で説く「種」「作」「書」の視点から考察する。

まず、初めて西洋の戯曲を能に翻案した高浜虚子の《鉄門》（1916年3月）を紹介する。この作品は詩人で劇作家のメーテル・リンク（1862－1949）の象徴劇「タンタジールの死」の翻案で、近代における芸術的新作能のさきがけとなった記念すべき能である。続いてアイルランドの詩人・劇作家ウィリアム・バチュラー・イェイツ（1865－1939）が創作した「舞踏家たちのための戯曲」のうち「鷹の井」を、能楽研究家の横道万里雄が能に翻案した《鷹の泉》（1949年10月）とその改作《鷹姫》（1967年12月）をとりあげ、ついで、フランスの外交官で詩人・劇作家のポール・クローデル（1868－1955）の詩劇「女とその影」を、仏文学者の木村太郎が翻訳し、泉嘉夫が作曲・型付した《女と影》（1968年10月）、同じくフランスの象徴派詩人ステファヌ・マラルメの詩「半獣身の午後」を、木村太郎が訳し泉嘉夫が作曲・脚色した「能による舞台詩《半獣身の午後》」（1974年9月）について述べる。

最後に、クローデル作詞・オネゲル作曲の劇的オラトリオ「火刑台上のジャンヌ・ダルク」に想を得て、発表者が脚本を書き、狩野琇鵬が作曲・型付・演出（狂言役者の場面は山本東次郎が演出）した新作能《ジャンヌ・ダルク》（2012年5月）について、オルレアン、パリ、エクサンプロバンスのフランス三都市での公演をふまえて、発表する。

なお余裕があれば、シェークスピアの「マクベス」に取材した、泉紀子脚本詞章・辰巳満次郎節付演出（間狂言監修野村萬斎）の《マクベス》（2005年10月）にも触れたい。